

3269
6



特
3269
6

神判

神判
神判

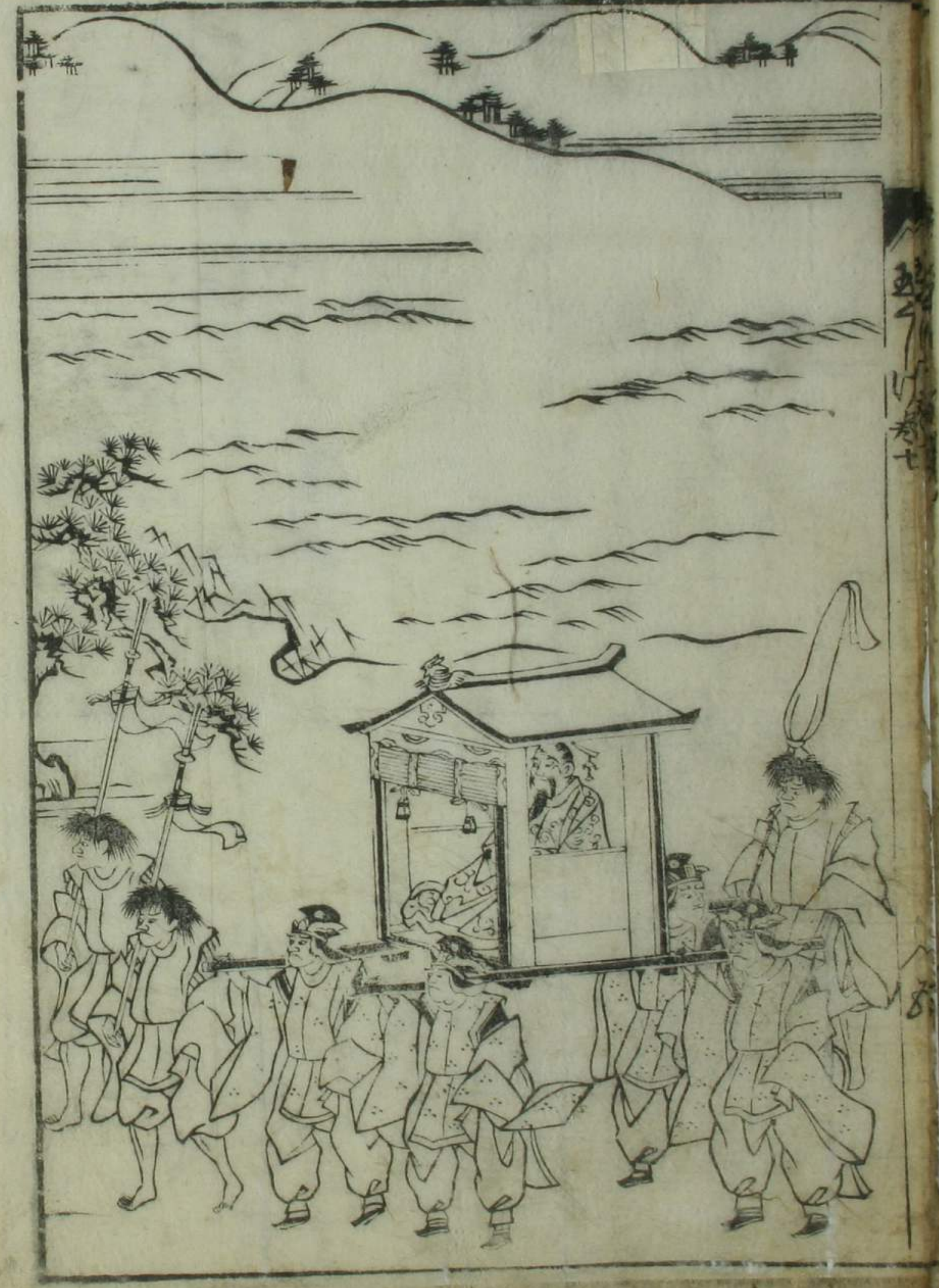
玉うけ巻之七

○白旗の神

河津藩

神判





遺骸を焚くして。その骨を焼くを造る事三十年ありて。
か川に生ずる病のうけ人をうくし。又一人のいづく東進の儀
塚の郷を賣家九婦姑ふけ入て孝のを盡す。其の夫高の
こめ。他國にあり。其の爲にれあは。姑おのき病に。かれば。
祈禱し。醫藥を書き見。效なし。婦人ふかあし。そ
あけきて。瘠戒沐浴し。香紙焚き。それ。いのりて
身代り。立て。姑の命をす。らん事。以。保。ふ。よ。れ。及。病
を。あ。し。れ。ん。で。姑。の。命。を。ま。す。け。又。其。の。婦。人。貴。子。二。人。を
生。め。皆。よく。父母。孝。の。を。盡。し。林。蔭。優。れ。あ。り。て。大
家。に。ま。り。て。大。俸。録。官。位。次。子。に。傳。進。し。子。孫。を。く。富
む。係。と。ま。じ。又。一。人。は。い。づ。く。佐。和。山。の。或。代。官。職。の。人。の。の

語。然。る。の。過。ふ。れ。借。録。し。あ。ら。ぬ。控。蔵。ま。と。に。あ。り。ん。る。あ
ふ。れ。ど。も。忠。義。の。こ。ろ。い。ふ。家。が。あ。り。と。あ。く。貧。欲。無。ん。り。
て。物。の。あ。し。れ。を。し。て。い。ま。い。ま。小。費。金。數。十。兩。を。短。し。と。あ。り。て。
理。を。極。ま。ま。げ。て。公。事。を。わ。ら。し。又。い。づ。く。布。帛。其。數。を
を。じ。さ。り。の。と。あ。り。て。吾。人。を。害。し。て。悪。人。の。方。へ。せ。あ。り。れ。す
ま。た。に。お。の。り。き。罪。の。ゆ。え。に。お。り。ん。た。れ。が。先。祖。の。陰。徳。あ。り
お。の。り。て。ま。い。り。し。ゆ。り。お。ま。ぬ。そ。れ。れ。ん。そ。罪。惡。無。ん。る。ん
い。づ。く。も。惡。薄。小。録。し。ぬ。教。年。に。は。は。り。必。す。滅。族。の。禍。ま。あ
り。又。一。人。の。い。づ。く。鏡。山。に。林。蔭。未。而。性。の。地。約。十。頃。を。と
て。の。家。を。富。く。事。欠。下。を。し。ま。り。れ。大。聖。會。致。後。の。り。て
歎。ふ。く。と。い。づ。く。撫。下。地。を。し。て。隣。家。の。田。地。の。わ。が。田。地。と。界



法人皆くらの御小暇一信後とらふおがうわしとぞ

○阿蘇北仙境

長谷川武敏大文とゆへし周防北五内義隆小流之
二舊切ありし大内の家之後の家内下れり其へ後
道乃くかす。或ア忠ぢく陳言すとのごも御ひも。
あり科おあなをきまごしおれん力おあをどひりふ不個
を立木不縁おつきく肥後國飽田郡小藪子河川にて
ありぬ或アえん南条隠逸を好む。おひ世しはは
す。心をうづみ跡をかうした。風花雪月小の海濱
月日送るやぐらとや年々くくは假おれぬあふあを

雨の水は年々人皆あふ思とて風流れわく趣あり。そのこぞ有
た才ありふあわねむ。お書連袂の心をしきく或アか
とくおア業同此報おど向ひらうひ。は縁しとくし
らひまを或アを屋さしきんおおひ内があふまどま
ふなれらあふあさうとてありおぬ人活いあふとくさ
おのくさひお男おとまればれらあを弁へかごる
け色部の四々ふの何々。井は座北陸櫻北中の多
れどくおふお大ありま。お兼ありま。あるを志す
このまゝあておれらるん口備くかむや。おぬらんを何
もを京於このかりん山雲浦を色あふのりら一せれ
いでふし。かひいづらんげし。お枕は便りもせりん









が男あ節ハ乃の長八とどりのめあそく骨あれまきあ
 てたかあして土を礎をき竹柱く生得果も悪をたゆ
 寺山野ふをせ江海にわく痛傷をまわす。まきと馬小
 のりて、無不山石をたふし。弓を引、泥池をうけ、事
 得よのふて、自中ふかけ廻り。毎の麻糍、此類いひ、
 とくもあくちえり。海小か人者をまわして、河原を備へ
 碎粗れあまのふい人、此婦、女をまびや。又ハすう、いそ
 臆どてすう、志をにく、こてきり、こちり、突倒し、こちひ
 奥、どりの。又、平生相撲をね、くも、色れ、佛園社、極小、
 一入、い、忠堂をわ、い、相撲を始、め、此、法、の、住、合、紙
 き、倍、沖、を、ま、び、い、い、喜、に、い、或、い、所、中、小、様、り

てすうのぶふふにぬぬ著る師ありて
らぬ河系狐狸化後命ありん歎かれりて
そく大かをいとりたぐ一折めと振あぐれぬ
しゆのかりて神の中よりぬ著る師神打あひ
披きえれえんくはよりぬ著る師神打あひ
乃く事とまきかりぬ著る師これより胸い
腹張りく若痛ぼかす、五體きり裂がどし
て狂人となりかきやくやくすけぬとて
ま何きもぐつておひ死せたりたり

玉うけま之七終

715
51

跋玉櫛笥後

余嘗觀李氏剪燈餘話酷喜其紀事之恠奇有托此
喻彼者有假名寓意者鬼幻百出信筆美文連日讀
之而不知厭竊嘆以謂本邦州郡之廣近代干戈之
間豈無奇事異聞如李氏所述者顧世之著述之才
致不多傳焉余不自揣欲效顰編輯然慣倭詞之俗
習不知所以裁文悖然擲筆不復省者久之蓄念所
發不能自抑又摸釋了意師拘張子述以俚語此僅
所見聞近世之事實耳鄙陋碎瑣寧足比前人之大

ハナナナ

ハナ

嬭人女兒之翫索題之曰玉櫛篋
出續編草藁未就姑竢他日去爾

元禄乙亥冬十一月朔且



京

西村市島右衛門

全

林

九兵衛

江戸

西村九左衛門

梓

同

半兵衛

